

デイヴィッド・サルツブルグ著「統計学を拓いた異才たち―経験則から科学へ進展した一世紀―」日経ビジネス人文庫、日本経済新聞出版社、2010 年 4 月 1 日刊を読む

The Lady Tasting Tea―紅茶の違いのわかる婦人―

1. 1920 年代末のイングランドはケンブリッジ、ある夏の午後のことだった。大学教授たちとその夫人、それに数人の客からなるグループが屋外のテーブルを囲み、アフタヌーンティーを楽しんでいた。ある婦人がこう言い出した。紅茶にミルクを注ぐのとミルクに紅茶を注ぐのでは味が違うのよ、と。
2. 科学者を自負する男性たちは、それはまったくナンセンスだよと一笑に付した。何が違うというのだ？彼らにしてみれば、紅茶とミルクが混ざってしまえば化学的な違いなどあり得なかった。一人の痩せた背の低い男がその問題に身を乗り出した。男はぶあつい眼鏡をかけ、灰色の(先を細く尖らせた)ヴァンダイク髭をたくわえていた。
3. 「その命題を検定してみようじゃないか」。興奮しながら、彼はさっそく実験を概説し始めた。ティーカップをずらりと並べ、いくつかには紅茶にミルクを注ぎ、残りはミルクに紅茶を注いで、二つの違いを主張する婦人に飲んでもらうことにしたのである。
4. 読者のなかには、これは取るに足らないある夏の午後のお戯れとして、さっさと片づけてしまえばいいと思う方もいるに違いない。「婦人に違いがわかったところで、どうということもないだろう？」と聞きたいだろう。「この問題は重要ではないし、科学的に優れた価値もない」とあざ笑うだろう。「偉い人たちはそのすばらしい頭脳をもっと人類のために使うべきだよ」と。
5. あいにく、科学の素人は科学とくればその重要性を第一に考えるかもしれないが、私の経験から言わせてもらおうと、おのおの研究に従事しているたいていの科学者は、その結果に関心を寄せ、研究活動を通して知的興奮を覚えるものなのだ。よい科学者ほど自らの研究が最終的にどんな重みを持つかなど、気にかけないものである。
6. そう、ケンブリッジの陽光まぶしい夏の午後のことだった。かの婦人は紅茶の淹れ方について正しかったのか、正しくなかったのか、その婦人が正しいかどうか判断する方法を見つけることをおもしろがって、どうしたら決着がつけられるかと髭の男を中心に話し合いを始めた。
7. 彼らの多くが髭の男とともに熱心に実験準備に加わった。ほどなくして、婦人に見えないところで紅茶が二つの違った淹れ方でカップに注がれた。やおら胸を張り、髭の男は婦人に最初のカップを差し出した。彼女はちょっとすすって、それが紅茶にミルクを注いだものだと言断言した。男は説明を省いてその答えをノートに書き留め、また次のカップを差し出した…。

[コメント]

米ファイザー社で長年活躍した統計コンサルタントのデイヴィッド・サルツブルグ博士の名著、原題「The Lady Tasting Tea」の日本語訳。読者を統計学の世界に一気に引き込む書。数学だけでなく、エクセル、SPSS のスキルを深めたい人、必読の書

－ 2013 年 4 月 19 日 林 明夫記 －